また、或日學生と共に藻岩山に植物採集を試みたことがあつた。樹上に苔の珍奇なるものを發見した先生は、自ら四つん這になり、學生に向つて『誰でもよいから、予の背中に上つて苔を採れ』と命じた。『七尺去りて師の影を踏まず』といふ思想にかたまつた當時の學生である。何れも躊躇して上るものなく、たゞ互に顏を見合せた。更に先生は『研究の爲め、眞理の爲めに師を足場にすることが、何て禮儀にもとるものか』といつた。學生は靴を脱がんとした。『靴ばきのまゝでよい。早く上つて採れ』と先生は再び聲を勵ましていつた。斯くて學生の一人黑岩四方之進氏は先生を土足のまゝ踏み臺にして、その植物を採集した。

クラーク先生の教育は、實に斯くの如きものであつた。『實踐躬行』！　それが先生の教育の全部であつた。先生の教育は『言』てなく寧ろ『行』であつた。『全人格』を投げ出しての教育であつた。即ちそこに偉大なる人格のひらめきが親はれてうれしいてはないか。

高潔にして偉大なる先生の人格は、在任八ヶ月の間に、すつかり學生を感化してしまつた。斯くて任期滿ちて、札幌を去るの日來るや、學生等は何れも馬首を連ねて恩師を見送り、札幌郊外六里の驛遲島松に至り、そこで最後の別れを惜んだ。別離の哀情禁じ難きクラーク先生も軈て袂別の意を決し、南部產の駿馬に誇り、馬上豐かに、而も聲朗らかに "Boys, be Ambitious" の名句を殘し、一鞭駒に與へて、坂を登り、疎林の彼方にその英姿を沒し去つたのである。

今こゝにこの劇的シーンを追想してみるとき、五十年にして尙ほ且つ、我等の若き血潮は高鳴を感ずるではないか。『子供等よ、須らく大志あれ、大望あれ』！　これが札幌の校風であり モットーである。彼クラーク先生の教育精神は實にこゝに在つたのだ。國家有用の材たるべく彼は學生に向つて『大志大望』の抱懷を敎へたのだ。彼は一外人に過ぎなかつた。而も彼の在職は僅か八ヶ月に過ぎなかつた。斯くても尙ほ且つ學生に偉大なる感化を與へ、不拔の校風を確立するに至つた所以のものは、全く彼の崇高なる『人格』の賜であり、且つその教育方法に一個の『大精神』がこもつてゐたからである。

自分が札幌に學んだのは、先生去つて二十數年の後であつた。而も先生の教育精神は、先輩

によつて我等に語りつがれた。さうして我等は恰も先生に親しく教を受くるの思ひを以て、先生の偉大なる精神に感銘した。……眞に教育に必要なるは、校舍の宏大といふことでもなく、また教育年限の長いといふことでもない。それは實に教育者その人の『人格』であり、その『教育精神』である。

一八、正受老人と白隱禪師

併し、斯くの如き實例は他にいくらもある。即ち一代の名僧白隱禪師が信州飯山に正受老人の教を受けたるが如き、またその一例である。

白隱が多年行脚遍歷を重ねたる後、越後高田の英巖寺に於て、大悟道の境に入るを得たる後正受庵を訪れたのは、寶永五年の四月で、彼れ二十四歳の時であり、正受老人六十九歳の時である。而して、彼れはその年の十一月には早くも飯山を去つたのであるから、彼の正受庵滯留は、僅か八ヶ月に過ぎなかつた。而もこの間正受老人が白隱を可哀さうな程、峻烈に叩きつけたことは世人周知の事實である。併し『惡くしとて叩くにあらず雪の竹』彼れを立派な人物に鍛へ上げたいと思ふ正受老人の希望と熱心とが、叩いて〳〵叩きぬかしめたのであつた。眞の鍛錬には、些の情をもさし挾まないところに、正受老人の眞意が親はれて尊いてはないか。

自分は先年、親しく飯山に正受庵を訪ね、當時の有樣を追想して、感激措く能はざるものがあつた。而もその事實が、如何にもクラーク先生のそれと一致してゐるので、興味を禁じ得なかつた。その滯留期間が、同じく八ヶ月であつたばかりでなく、師弟袂別の場合が、如何にもよく似通つてゐるから面白い。

虎穴に入つて眞の虎兒を得たのが、この場合に於ける青年禪師白隱であつた。その白隱が正受老人の許しを得て、正受庵を辭去するや、正受老人は名殘を惜み、老の身をも顧みず、二里餘りも送つて出た。さうして、別れにのぞみ、正受老人は白隱の手を固く握り『どうか全力を盡して、怜悧の衲子、一兩筒を打出せよ、必ず多きを求めるな。多く求めると大器を成し得るものぢやない。若し偶の手で一兩筒眞正の種子が穫られたならば、或は再び古風を挽回するこ

とが出來よう』といつて大器成就の要諦を說き、やゝ久しうしてこれを放つた。斯て白隱は恩師最後の懇諭を感謝し、感涙襟を浸し、悄々として去り、老翁もまた、別離の涙止めあへず、後振りかへりつゝ、戀々として庵に歸つて行つた。

正受庵は小さな草の庵だ。自分はその規模の貧弱なるのに驚いた。さうして同じく貧弱であつた舊札幌農學校の校舍を聯想した。併し重ねていふが、教育に必要なことは校舍の宏大さでもなければ、寺院の立派さでもない。世人は札幌に於けるクラーク先生八ケ月の感化が獨得の校風を確立し、また飯山に於ける正受老人の八ケ月の鍛錬が、古今の名僧白隱を完成せしめたこの二つの事實を何と見る。

『大器成就』の要諦を說いた正受老人の氣持も、『大志大望』の抱懷を敎へたクラーク師の氣分も、言葉こそ違へ、その精神は一つだ。我國の敎育がこの大精神に甦るとき、そこに始めて時代の要求する眞の敎育が生れ出づるであらう。

一九、吉田松陰とその敎育

吉田松陰が傳馬町の獄に投ぜられたのは、安政六年の七月であり、同じく死刑に處せられたのは十月の二十七日、彼れ僅かに三十歲の年であつた。而して彼れが松下村塾を開いたのは、安政三年の七月から、同五年の暮に至るまで、僅に二年半の日子に過ぎなかつた。而も、その間多くの人材を輩出し、維新の大業達成に貢獻せしむるに至つたその敎育は、吾人の注意に價するものがある。

松下村塾は座敷八疊、臺所六疊といつた樣な小さなあばら家であり、且つその敎育期間は僅かに二年半に過ぎなかつた。而も三十歲にも達しない青年敎育家たる松陰が、斯くの如き偉大なる敎育的功果を擧げ得たる所以のものは、全くクラーク先生や、正受老人の場合と同じく、彼れの偉大なる人格と、その高邁なる敎育精神とに歸しなくてはならぬ。

元來吉田松陰は、或は大なる學者でも、また大なる經世家でもなかつたかも知れない。併し

彼は常に至誠を以て一貫し、事を行ふに當つては、血のにじみ出るやうな意氣を有し、國事の爲めには、何時でも全生命を投げ出すべき決心を持つてゐた。故に革新を必要とする時代の教育家としては、實に理想的のものであり、そこにまた彼れの偉大なる人格を發見することが出來る。

松陰の教育精神は、彼れの自作にかゝる『士規七則』に窺ふことが出來る。今その中の一部を譯出すれば、左のやうなものである。

一、凡そ生れて人と爲る、宜しく人の禽獸に異る所以を知るべし、蓋し人に五倫あり、而して君臣を最も大と爲す。故に人の人たる所以は忠孝を本と爲す。

一、凡そ皇國に生るゝもの、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し皇朝は萬世一統にして初國の士夫、祿位を世襲し、人君は民を養つて以て祖業を繼ぎ、臣民は君に忠にして以て父の志を繼ぐ。君民一體、忠孝一致、たゞ吾が國を然りと爲す。

一、士道は義より大なるは莫く、義は勇により行はれ、勇は義により長ず。

一、死して後已むの四字、言簡にして義廣し。堅忍にして果決、確乎として拔くべからざるもの、是れを含きて術無き也。

即ち、我等はそこに松下村塾の主義綱領の大要を窺ひ知ることが出來る。而も松陰の門弟教育の實際は一種の風を爲してゐた。松陰は敢て嚴然たる師を以て居らず、却つて親和なる友人として彼等を指導し、相共に勵み合ふの態度を取つた。而して彼は常に卒先して實行の手本を示すのであつた。故に松下村塾の眞生命は、寧ろ學問にあらずして精神であり、『精神』と共に『實行』であつた。實行の學問を貴んだが故に、彼れの教育は一種獨特の教授法を執つた。即ち朝のうちに會讀すること少時、その後は畑に出でゝ耕しながら、米をつきながら、糠をふるひながら、講義もすれば、會讀もするのであつた。彼れの教育は机上の空論にあらずして、實際に則した精神の修養であり、訓練であつた。從つて彼れの教育は彼れと共に何れの時、何れの場所に於ても絶えず行はれた。即ち彼れの生活の總てが教育であつた。且つそこには今日の所謂『勞作教育』が多分に取り入れられてゐた。『勞作を通しての精神修養』！　そこに獨特の

教育を行ひ、而も精神を磨くに當つては、一歩も假借しないところに彼れの教育精神がある。

彼れの教育は徹頭徹尾精神の教育であり、實行の教育であつた。即ち『言』の教育たるよりは、寧ろ『行』の教育であつた。この點クラーク先生の教育精神とよく一致してゐる。尙ほ松陰が嘗て門人たる品川彌二郎に與へた書中の一節に『人間僅か五十年、人生七十古來稀、何か腹のいへる樣なことを遺つて死なねば、成佛は出來ぬぞ』と敎へたところに就て見ても、彼れの敎育精神が奈邊に在るかを覗ひ知ることが出來る。その大精神は『大志大望』を說いたクラーク先生、更に『大器成就』を敎へた正受老人のそれと一致してゐる。そこに我等は彼れの敎育家としての偉大なる人格と、その敎育精神とを發見することが出來る。即ち松下村塾は見るかげもない樣な小さな田舍家に過ぎない。また彼れの敎育は僅かに二年半に過ぎなかつた。故に彼の敎育の成果は校舍の宏大なりし結果でもなく、またその敎育年限が長かつたといふわけでもない。それはたゞ彼の偉大なる人格の感化であり、彼の卓越した敎育精神の賜である。

今日の學校敎育は大量生產の敎育である。四民平等、凡ての國民に敎育を授けんとする今日に於て大量生產もまた止むを得ない。產業上の大量生產はその製品に就てそれ〴〵檢査を行ひ不合格品はこれを廢棄するの便がある。併し人間敎育の大量生產に於ては、出來損ないの人間といへども、これを廢棄處分に付する譯には行かぬ。從つてそれ等のものが國家社會に及ぼすところの影響は決して少くない。故に今日の急務は、それが人文科學たると、自然科學たるとを問はず凡ての敎育機關を通じて一樣に精神敎育の徹底を期し、人格第一主義の敎育を確立することである。即ち『祖國愛』と『同胞愛』とを基調とした精神敎育を徹底的に行ひ、人格敎育の完成に努めることが、現下燒眉の急務である。

二〇、敎育は制度に非ずして『人』だ

文字あるものが、文字なきものよりも、寧ろ不信であり、有學者が無學者よりも、寧ろ不德だといふのが今の世の中。……斯くて國民の多くが『物質』を目標とした、享樂本能の生活を思ふに至つたのである。『汗』と『脂』とを資本として、强く正しく生きんとするよりは、寧ろ

口先で、うまく世間を誤魔化し、安樂に生きんとする傾向の特に著しくなつて來たのが、今日の世相である。

斯くて國民精神の頽廢も、國民元氣の衰滅も、所詮は現在教育の持つ缺陷に基因するものなることを思ふとき、我等は何よりも先づ國民教育の『精神化』と、その『人格化』とを主張せざるを得ない。

我國教育の現狀が空疏なる知育の偏重に陷り、『人間修養』の點に於て缺けたるものゝあることは屢々論じた通りである。而して今日の各學校教育——特に大量生産を目的とする——に於て、この弊を生むに至つたことは制度上、また、止むを得ない點かも知れない。一つの大學にして數種の學部を有し、多きは一萬に近き學生を抱容せる現狀に於て、往時の私塾又は寺小屋に於けると同樣の人格的感化を要望するのは無理であるかも知れない。併しそれでも今日の大學教育は餘りにも學問の切り賣りに偏して人間修養の大目的に副はないものがある。若し學校そのものに於て制度上それが充分に出來ないといふならば、何等か他に適當の方法を講じて、この缺點を補ふの途を開かなければならぬ。……大學は學問の研究所であり、學問の蘊奥を究めるのがその目的の一つではあるが、同時に國體觀念の涵養と、國民精神の體得とが、その眼目でなければならぬ。たゞ大學が統一なき各種學問の分離的注入機關に過ぎずして『全人』教育が不可能であるとしたならば、我等はその存在價値を疑はざるを得ない。

大學に於て既に然り、況んや專門學校に於てをやであるが、更に中等學校及小學校に於てその弊ありといふならば、我國には『學校在つて、教育機關無く、學問あつて教育無し』の歎なきを得ない。こゝに於てか、この現狀に滿足せず、或は私塾類似の學校を創設し、或は農民道場の如きものを新設するの傾向盛んなるに至つた。これも時代の要求によつて生れ出たとするならばまことに結構なことである。何れの國の歷史を見ても、教育の現狀に不滿ある場合には新教育主義を標榜したる私學の出現を見、それが軈てはその國の教育に新生命を與ふるの例が少くない。例へばデンマークが斯くの如き經路を踏んで、今日國民高等學校の出現とその發展とを見たるが如き、その一つであらう。故に我國に於ても、今後さうした私塾や道場が盛んに

興り、建實な發展を遂げ、特に國民精神の鍛錬上貢獻するところあらんことを熱望して息まない。併しさればといつて、我國の教育機關の總てを斯の如き特種機關に改變し得べきものではない。故に我國の教育は制度の上に於ても、一大革新を必要とすることは無論であるけれども、その凡てを昔の私塾に還し、寺小屋に戻す譯にはゆかぬ。こゝに於てか、全體的にいふならばその形は現代の實情に則せしめ、その精神は昔の教育精神に復活せしむるの方法を講ずるこそ今日の教育改善の根本方針でなければならぬ。

私塾の優れたる點は、師弟間に於ける人格と人格の密切なる結合であつた。偉大なる師の人格が、直ちにその弟子達に移し植ゑられたところに、その特色がある。即ちその教育は『言』の教育にあらずして、寧ろ『行』の教育であつた。その全人格を投げ出して、實踐躬行の教育をしたところに『人間教育』が出來、『全人格』の完成を見ることが出來たのである。而して、その教育の目的が大量的『數』の生産にあらずして、少量的『質』の生産に在つたことが、精神教育に徹底することの出來た大きな原因の一つである。故に教育は制度にあらずして、『人』である。故に教育者に『人』を得なければ、制度は死物に終らざるを得ない。

二一、先づ教育家としての天職を自覺せよ

我國の教育が、劃一主義の弊に陷つてゐることは、既にこれを述べた。全國一律に規定せられた教育制度が如何に『人間教育』の上に不都合であるかは、今更論ずるまでもない。殊に『人格の陶冶』と『精神修養』とに全力を盡さなければならぬ筈の中等學校の教職員が、轉々として在任期間の短かいばかりでなく、特に鄉土に出發して、ほんたうの人間教育の基礎を作り上げなければならない筈の小學校長その他の教員が辭令一本で、轉々として移り變つて行く現狀を以てして、どうして國民教育の完成が出來ようぞ。而してその然る所以のものは、制度化せられた學校教育の弊害である。今日の學校教育は『人』よりも『制度』が先きになつてゐる。『人』が在つて學校が出來るのではなく、『學校』が出來て、『人』を求めるのだ。從つて今日の教育者は他の一般官公吏と同じく、たゞ一種の『職業人』に過ぎない。從つて農村の小學校

よりは都會の小學校を欲し、田舍の中學校よりは都會の中學を望み、更に小學校よりは中學校中學校よりは專門學校、專門學校よりは大學を希望する。而してそれが職業人としての出世にもなり榮達にもなる。併しそれでは教育の眞目的は達せられないし、眞の教育家としての使命を果し得るものとは考へられない。

世間では、教育者を一般社會を超越した別世界の人の樣に考へ、教育者に對する註文の苛酷なるものがないでもない。併し教育者といへども人間である以上、凡ての人と同樣に生活して行かなければならぬ。その人の努力に對する報酬と地位とを附與することの當然なことは、今更いふまでもない。併しながら、今日の教育者――決して全部とはいはぬ――は、餘りにも職業的意識のみが發達して、自己本來の天職を怠つてゐるのではないかと思はるゝ節がないでもない。教育者に望ましい點は、自分の仕事が單なる職業にならずして、物質に則した職業以上に、或尊い精神的な大使命を有することを自覺して貰ひ度いことである。その尊い使命に徹底するとき、そこに始めて眞の教育が生れ出づるであらう。

南洲翁は嘗て『命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られるなり。』といつて居られる。これは現代凡ての國民の念としなければならぬところであるが、特に教育者にこの信念があつてほしい。この信念に徹して、始めて教育者としての眞使命に精進することが出來るであらう。故にこの大精神に則して、教育者の待遇法を特定するの必要あるはいふまでもない。

然るに今日の教育者にはこの信念が缺けてゐる。從つて學校は單なる學問の『切賣所』であり、智惠の『計賣場』であるかの感なきを得ない。學問知識の普及徹底と共に人間として國民としての精神教育を完成するところに學校の眞使命はあるのだ。然るに今日の學校には『學問』は在つても『教育』はない。『智惠』は在つても『魂』がない。學校は『學問』の切り賣りをする所だと考へてゐる學者や教育者が少くないから、我國の國體を破壞し、日本精神を冒瀆する樣な學者も出るのだ。また學校が學問の切賣所だとするならば『牛肉屋』と何等選ぶところがない。從つて自分の尊い肉まで切り賣する不心得な女教員が出るのだ。一體これで日本の教育

はよいのか。

學校が『智惠』の計り賣りをする場所だとするならば、『居酒屋』と何等變るところがない。世間には『マムシ酒』といふのがあるが、人間に精力をつけるにはよい酒だと聞く。然るにこれに語呂のよく似た新酒に『マルクス酒』といふ毒酒がある。學校を居酒屋と考へてゐる小學校の先生達が、盛んにこの新酒を密造して、小學校の兒童に飲ましてゐた。日本では未丁年者の飲酒は法により禁じてある。近頃は禁酒法の年齢を二十五歳まで延長しようといふ改正法律案が議會毎に一部の議員から提案されて居る程だ。併し普通の酒なら醉ふても時が經てば醒める。併し『マルクス酒』はさうはいかぬ。一度この毒酒を飲んだら最後、腸の底までも眞赤に染り、貴い日本魂までも痲痺せしむる。それでも日本の教育は心配がないといへるだらうか。……今日の日本はこれ等の時弊を一掃すべく、眞に教育者としての眞使命を自覺し、且つ日本人としての全人格を立派に具有するところの眞の教育者を要望して息まない。

二二、人格教育の第一歩は小學校から

我國の學校をして『學問』と共に『教育』あらしめ、『智惠』と共に『魂』あらしむるのが、今日の急務である。即ち何れの學校に於ても、人間として、國民としての精神の修養、人格の陶冶を怠つてはならぬ。人格第一主義の教育を徹底するところに教育改善の眞目的がなければならぬ。故に專門の學校に於て、また大學に於て今日の時弊を一掃し、この使命達成に全力を盡さねばならぬ。併しそれよりも尙ほ緊要なのは、小學校の教育であり、中等學校の教育である。

嘗てデンマーク農村の救濟主とも稱すべきグルンドウキツヒは『物に感じ易い青年期に適切な教育を受くるか否かは、單にその人個人の幸不幸の分れ目であるばかりでなく、實に國家の幸不幸の分れ目である』と稱し、この尊い青年期に適切な教育を施さんが爲めに國民高等學校を創設するの基礎を作つた。而してこの主張は直ちに移して以て我國の中等學校に適用するこ

とが出來る。物に感動し易い中等學校時代に、しつかり個人としての人格的陶冶、國民としての精神的訓練を徹底し、日本人として、また日本國民として、誤りなき自覺と信念とを附與することが、個人としても國家としてもその幸福を招來する所以でなければならぬ。然るに我國の現狀はこの點に於て最も缺けたるところがある。

國民教育の完成を目的とした中等學校がその實一種の豫備校たるに過ぎず、たゞ學問知識の分離的注入と準備教育とに專念し、何等人間教育に力を盡すの餘裕を存じないのが、今日の實狀である。無論『倫理』に關する學科はある。併しその實は一種の學問たるに過ぎない。學生の最も喜ばぬ學科の一つとなつてゐるのは『倫理』だ。……これは今日の倫理が、餘りに形式に流れ、餘りに理論に偏してゐる結果である。倫理は道德を講ずる學問だ。故にその實際は、理論にあらずして、實踐でなければならぬ。また、それは講義にあらずして、躬行でなければならぬ。人格陶冶、精神修養の途は、たゞ『行』あるのみだ。而してその『行』たるや、たゞ教育者その人の『全人格』の表現であらねばならぬ。この意味に於て中等學校の倫理は專門教諭の擔任のみに限るべきものでなく、全職員悉く倫理の擔任者たらねばならぬ。數學の先生が單に數學を教へることのみを以て任終れると考へるのは間違ひである。國語の先生が單に國語だけの先生だと考へてゐるのは誤つてゐる。數學を通じて、生徒を人格的に感化し、國語を通じて生徒を精神的に指導し、そこに大きな人間教育を完成することが、中等教員の眞使命があることを自覺しなくてはならぬ。この自覺なくして監む場合、そこには『先生』と名づくる一個の『職業人』を發見するより他に何ものもない。

實業補習教育は、青年大衆の教育機關たるの意味に於て、中等學校と同樣の教育方針に徹底しなくてはならぬが、殊にこゝでは勤勞を通じ、勞作に依つて精神の修養に徹底しなくてはならぬ。併しそれよりも尙ほ一層大切なのは小學校の教育である。物に感じ易い青年期に適當なる精神教育を施し、その人格的修養を完成せしむるの必要なことはいふまでもないが、更に純眞玉の如き幼年時代の教育に於て誤りなきを期することは、より以上に必要だ。即ち、小學校の教育は白紙の上に思ふがまゝに自己の理想を描き得る立場に置かれてある。故にこの教育こ

そ凡てのものゝ基礎を成すものである。この教育に於て人間として國民としての正しき信念を強く打ち込んで置くことが、軈ては中等學校に於ける人格教育の基礎を爲し、また大學その他の專門學校に於ける學問修得の土臺を形作ることになる。卽ちこの信念に則した教育こそ、眞の小學校教育といはねばならぬ。……この時代の教育は理屈でなく信念である。理屈を拔にした信念こそ眞に人間を强く正しくするものだ。宗教家は常に『宗教は理屈でなく信念だ、故に先づ理屈を拔きにして信ぜよ』と教へる。宗教を『學問』として取り扱ふ場合には理屈が必要だ。併しそれを『信仰』として取り扱ふ場合には理屈の必要はない。理屈は後で考へて遲くない。そこに『宗教學』と『宗教』との區別がある。人格の教育にも理屈はいらぬ。理屈よりも『信念』だ。『信念』に則した人格教育こそ眞に人間教育の基礎を爲すものだ。故に人間教育はこゝから出發しなくてはならぬ。『人格教育の第一歩は小學校から』

二三、小學校教員と師範教育の改善

人格教育を第一義とする新教育に必要なる要素は、制度的形式でもなく宏大なる校舍でもなく、また教育年限の長いといふことでもない。卽ちそれは、教育者その人の『人格』であり、『教育精神』である。故にこの目的達成の爲めには、先づ以てこの理想を實現するに足るべき教育者の養成に努めなければならぬ。こゝに於てか師範教育改善の必要が起つて來る。

今日の師範教育には改めなければならぬ點が非常に多い、併し自分はこゝにその缺點を詮議しようとは思はぬ。何となれば、師範教育の改善は、今や議論の時期を過ぎて、實行の域に達してゐるからである。たゞ從來の師範教育が、所謂師範型に囚はれ、爲めに我國の教育界が何となく陰慘な空氣に閉ざされてゐるかの感あるを遺憾とする。故にこの空氣を一掃するところに、師範教育改善の主眼がなければならぬ。

一九二六年、獨逸に行はれた師範教育の改革に關し、時の文部大臣ベッカー博士は『從來師範學校は貧困子弟の登龍門として渇仰されてゐた。併し今日の社會的見地より考察すれば、その資質が教育者として適材なりや否やを顧みず、またその心中、教員たることを熱望するでも

ない場合に、貧困子弟の向上心に燃えたる者をして、悉く教員たらしめんとすることは、無意味である。更に一歩を進めていふならば、教員の職を貧困子弟の立身出世の門口とすることは寧ろ危險である。如何となれば、これが爲めに、貴き國民陶冶を犧牲にするの虞があるからである」と稱し、更に『新國家は今少しく社會的關心を深くし、適材適所の立脚地に立ち、教員養成機關としての師範學校と、貧困子弟の登龍門としての學校とを斷然區別しなくてはならぬ』と論じてゐる。

我國の師範教育もこれに類するところが多い。自分は教育の機會均等を主張し、四民平等の教育を高調する。今日の如く貧富の如何によつて、學校教育を受くる上に公平を失することは是正しなくてはならぬ。併し、その爲め依然として師範教育を犧牲に供する譯にはゆかぬ。ベツカー博士のいふ如く、我國に於ても貧しき者の子弟にして優秀なものがあつたならば、これが教育は別に考へなければならぬ、而して方法に就ては、自分がさきに論じたところである。この意味に於て將來師範學校を中等學校と聯絡せしめんとする計畫は適當であり、そこに囚はれざる氣分の師範教育が生れ出づるものだと信ずる。

師範教育の程度を高めることも、時勢の進運に伴ひ當然のことである。教育者が學問的に、しつかりした基礎を有することは必要である、併し、師範教育の目的は、教育者を作るにあつて、學者や、專門技術者を作るのではない。若し師範教育が學者を作り、專門家を作るにありといふならば、何も特種の教育機關を設置する必要はない。併し師範學校は教育者を育成するのが目的であるから、普通の大學や、專門學校と異るところがなければならぬ。單なる學問の修得にあらずして、明日の日本を背負つて起つべき第二の國民を完成すべき尊い教職に從事すべき教員を養成するのであるから、學問の他に教育家としての特殊な教養、修練が必要だ。故に師範教育の改善が、單に學校昇格の意味であつたならば、それは無益なことだ。

近年學問の發達に伴ひ、國民の知識もその生活も餘程專門的になつて來た。その分離的傾向を常に調節し、これを統合し『日本精神』に融合して、誤りなき新しい人間と、生氣ある國民とを作ることに精進するのが教育者の任務である。これを一般的にいふならば、普通の職業に

從事するものは、その專門的知識と技術とにより、その任務を全うすることが出來る。併し小學校教員にありては自己の『人格』そのものが、直ちにその職業の目的を達する上の基礎を成すものである。勿論どんな職業であつても、常に完全な人格を背景とすることは論を俟たない。即ち自分が『人格第一主義の教育』を主張する所以もそこにある。併し特に小學校の教員にありては、自己の『人格』そのものが、教材ともなり、方法ともなるのだ。『人格即教育』といふところに、眞の小學校教育はその生命を發見するのだ。

小學校教育の眞目的は『全人』特に『日本人としての全人』を作るに在る。故に單に知識の注入のみを以て滿足することが出來ない。即ち實踐的な、さうして國民的な『全人格』を完成するところに、その眞使命がある。而して、この目的達成の爲めに必要な小學校教員の資格は單に學問知識の修得のみを以てしては足りない。そこには利己を排し、時流に抗し、自己の大使命を達成すべく、理想の大道をまつしぐらに邁進するの信念を體得することが必要だ。こゝに於てか師範教育の中心は『專門學科』の修得にあらずして、『人』を作る點にあらねばならぬ。更に小學校教員の天職は、自分の人格を兒童に移し、兒童を通じてこれを擴大し以て國家社會に貢献するに在るのだ。即ち人間の持つ美しい『花』を咲すのに必要な『根』の働きをするのが彼の使命だ。故にいやしくも小學校教員たらんとするものは、根の持つ『犧牲的精神』と同じ樣な『犧牲的精神』に徹底しなければならぬ。故にこの人生觀を養成することが師範教育には特に必要だ。

デンマークの國民高等學校は教員採用に何等の資格規程を設くることなく、廣く人材を求めてゐる。而して、そこに『人間養成』を目的とした同學校の眞價が發揮されてゐる。我國に於ける教員採用の資格規程は餘りにも窮屈だ。もう少し門戸を開放し、廣く人材を求むるの途を開かねばならぬ。而して、特に『人格第一主義』の教育を徹底せんが爲めには、小學校に於て實業補習學校に於て特にその感を深ふするものがある。而して『人格第一主義』の教員詮考に徹底するに於て、始めて『人格第一主義の教育』は、その目的を達成することが出來るであらう。

二四、宗教教育と家庭教育

我國の教育は、餘りにも學校教育に囚はれ過ぎてゐる。學者が單に象牙の塔に立て籠つてゐるだけでは、學問の普遍化は行はれない。また教育者が單に校内に籠城してゐるだけでは、國民教育の普及徹底は期せられない。眞に學問の實際化を計らんとならば、學者がもう少し象牙の塔を出て、街頭に立たねばならぬ。また眞に國民教育の普及徹底を期せんとするには、教育者が校門を出て、社會に進出しなくてはならぬ。

殊に小學校の教員たるべきものは、單に當該學校又は學園の精神的指導者たるに止まらず、その立派なる人格と、その洗練せられたる態度とを以て、普く全町村民、全市民、否な全國民を教化するの抱負と信念を有し、更にそれを直ちに實行に移すだけの熱誠と勇氣とを具有するところがなくてはならぬ。即ち我等の主張する眞の人間教育は、學校教育のみでは到底達成することが出來ない。こゝに於てか自分は『家庭教育』の再興と、『宗教教育』の必要とを主張せざるを得ない。

『家庭教育』は學校教育の不完全な時代に於ては寧ろ大に尊重せられ、我國の教育上大きな役割を演じてゐた。然るに最近學校教育の進むに從ひ、家庭教育の衰頽を見るに至つたことは、實に遺憾に堪へない。子供は學校にさへ預けて置けば、それで教育は完成するものだと考へてゐる人も少くはない。また家庭教育の必要を痛感してゐる人でも、職業等の關係等から事實、それを行ひ得ないといふのが、我國の現狀である。

成る程、學校教育は進んだ。併しそれは主として、制度上の話である。規則に囚はれ、形式に流れた今日の學校教育に於ては、師弟の情誼は地を拂つて影だになく、そこには物質による或種の聯絡こそあれ『人格と人格』『靈と靈』との交渉は殆ど見ることが出來ない。斯くて人間としての人格的修養は、全然忘れられてゐるのが一般である。會々目醒めた教師による人格的陶冶も、片つ端から家庭に於て破壞されつゝあるのが、今日の實情だといつても決して過言ではない。從つて人間として、また國民としての精神的訓練の不充分であるのは、當然のことで

ある。

歐米に於ては家庭教育がよく徹底してゐるのが普通だ。而も『家庭』、『教會』、『學校』……この三者の聯絡がよくとれてゐるところに實際教育の妙味がある。知識の修得は、主として學校教育に、人間としての修養は、主として家庭教育にこれを求め、更に教會に於ては、宗教的教養を受けるといつた樣な有樣である。故に三者各々その足らざるところを補ひ、以て人格的修養に萬遺憾なきを得て『全人』の完成が行はれるのである。然るに我國が外國の教育制度を取り入れるに際し、單に學校教育に關する方面のみを模倣し、精神教育方面に大きな役割を擔任すべき大切な家庭及教會――寺院――の教育があることを忘れたのは、何といつても教育上の大きな缺陷である。これだけでは、どうしても、ほんたうの『人間』は作り得ない。故に我々が『人格第一主義』の旗印を押し立てゝ進む以上は、宗教教育と、家庭教育とを無視するわけにはゆかぬ。

文部省は明治三十二年に訓令第十二號を以て『學校に於ては宗教教育を施してはならぬ』旨を嚴格に示達してゐる。而して過去に於て我國の學校教育が宗教教育を全然無視して來た點には、色々の理由があつたことは今更いふまでもない。殊に『國教』なき我國に於ては、或は當然のことであつたかも知れない。併し宗教的信仰なき國民は常にその生活に不安を感ずるのが一般である。單に知育だけでは『人間』は出來得ない。大信念を根柢とするのでなければ『人格の完成』は出來るものではない。教育の普及と知識の向上とを盛んに謳歌してゐるところの現代日本人の生活に常に不平あり、不滿があるのは、一體何の爲だ。ルーソーは『教育の目的は機械を作るにあらずして、人を造るに在り』といつてゐる。鐵製の機械には本能がない、併し人間で造つた機械には本能が潜在してゐるから仕末におへない。即ちウエリントンが『宗教を無視しての教育は、技倆ある惡魔を作る』といつたのはそこにあるのだ。

近年、文部省が訓令第十二號を稍々寛大に解釋してゐることも事實であり、更に宗教家達よりも盛んに宗教教育の必要が說かれてゐる。これはまことに結構なことだ。併し國教なき我國に於て學校教育の上に效果的な宗教教育を取り入れるには、どんな方法を採るべきか研究しな

ければならぬことだ。自分は今日の教育に缺けたる、宗教教育の適當なる進展を熱望して息まぬ。

二五、三ツ兒の魂百まで

自分はさきに眞の人間教育、人格教育は小學校に始まり、中等學校に完成すべきを主張した。併し眞にこの目的を達成せんが爲めには、家庭教育の協力を仰がねばならぬ。否な家庭教育は寧ろ小學校教育に先立つて重要なものである。

人間の教育は、先づ母の體内に於て始まる、即ちそれを胎教といふのだ。ジャン・パウルは『教育は子供が産聲を擧げると同時に、その働きを始める』と稱し、更にエッチ・パローは『教育は母の膝の上から始まる』ともいつてゐる。即ちそこに家庭教育の重要さがある。ペスタロッチーは『義務だとか、感謝だとかいふ言葉を聞き分けることの出來ない赤ん坊に、母親は乳房を含ませながら、感謝の本質なる愛をその中に形作る』といつてゐる。昔から偉人の蔭には必ず賢母が在るといはれてゐるが、西洋の諺にも『一人の良母は百人の學校教師に値す』とあり、ナポレオンが『子供の未來の運命は、常に母の細工に在り』といつてゐるのも、皆家庭教育の重要さを物語つてゐるのだ。『三ツ兒の魂百まで』― のたとへ、この時代に於ける教育こそ眞に人間の一生を支配するものではなからうか。……家庭教育は主として母親によつて行はれるのは當然のことである。從つて母親を中心とした家庭教育の基礎が母性愛に出發してゐるのは自然の成行きである。ペスタロッチーは更に『人間の家庭的關係は、人間の社會的教育に對する第一にして、また最も重要なる要素である』と稱し、且つ『父の家は凡ての純なる自然教育の基礎であり、道德の學校、國家の學校である』といつてゐる。故に『家庭を離れて教育はあり得ない』と稱するも敢て過言ではない。

併し、自分はこゝに鹿爪らしく家庭教育論を試みるつもりはない。またその必要を認めない。併し、自分の乏しい體驗に顧みても、家庭教育によつて人間の運命は定まる樣な氣がしてならぬ。昨昭和八年の八月であつた、自分は神奈川縣主催の社會事業に關する講習會に於て農村問

題、教育問題等に就て講演を試みたことがある。然るに講演が濟むと講習生の一人たる立派な紳士から『あなた自身は、何によつて修養せられたか、またあなたの宗教上の信仰は何ですか』といふ質問を受けた。その際、自分は『自分に修養が出來てゐようとは思はない。併し自分のどこかに少しでも人間修養がありとするならば、それは幼年時代――私は十四歳の春、郷里の小學校を卒業すると同時に東京に出た――に受けた家庭教育の賜である』と答へた。併しこれは自分の僞なき告白である。

自分は鹿兒島の一農村に生れたものであるが、家庭に於ける教育は私塾の精神に出發して、頗ぶる嚴格なものであり、凡てが武士道を基調とし『人間道』に則したものであつた。島津日新公の『いろは歌』四十七首は、藩士三百年間の道德經として稱誦せられたものであるが、自分もまだ小學校に入學しない以前に於て、夙くも父に教へられて、暗誦したものであつた。

いにしへの道を聞いても唱へても
　我がおこなひにせずば甲斐なし

樓の上はにふの小屋も住む人の
　心にこそは高きいやしき

はかなくも明日の命を頼むかな
　今日もけふもと學びをばせで

似たるこそ友としよけれ交はらば
　われにます人おとなしき人

といつた風に、今でもよくそれを暗記してゐる。この一事を以てしても、當事の家庭教育の實際を窺ひ知ることが出來る。更に祖父は常に南洲先生を說いた。さうして南洲遺訓の中に『道は天地自然のものなる故、講學の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ』とあるのをよく說明して聽かしたことを、今にもよく覺えてゐる。併し、家庭教育の任は祖母なり、母なり、姉なり、專ら女の人達が擔任したのはいふまでもない。

我が薩藩は男尊女卑の極端に行はれた國であつた。從つて一般士族の家庭では女子の學問は

殆んど禁じられてゐるのと同然であつた。斯くて自分の祖母も、母も、目には一丁字もなかつた。併し人間としての教養は立派に出來てゐた。常に武士道に則した人間道德を熱心に說き、これが實踐躬行に導いて呉れたのが祖母であり、母であり、姉であつた。さうして文字なき女性達が『母性愛』を傾け盡して教へて呉れた家庭教育、そこに自分は永久拔くことの出來ない大きな或ものを打ち込まれた樣な氣がする。

自分達の家庭教育は『國家主義』、『家名宣揚主義』及『鍛錬主義』に終始一貫してゐた。祖母も、母も常に敬神崇祖の道を示し、忠孝の心掛を說き、文武兩道に勵めと教へ、更に家名をけがすな、人にひけをとるな、嘘をつくな、人に無禮すな、忍耐をせよ、と教へた。また、兩親は常に『汝の頭上には君主まします』と强く教へた。母といへども、我が子の枕邊を過ぐるなく、頭を疊の上に就けて寢せしめず、また物干竿の下を潛るを許さなかつた。而してこれ等の仕付けは、何れも『君主頭上にまします』の精神に出發したものであらう。

ジヤン・パウルは『母は私達の精神に熱を與へ、父はこれに光を與へる』といつてゐるが、この熱と光こそ眞に家庭に於ける人間教育の基礎を爲すものだと考へる。而して、これ等の家庭教育は理屈を拔きにした『行』の教育であり『信念』の教育であつた。正確な意味に於て自分には宗教がない。併し自分達の家庭には『氏神』がある。『氏神』を中心とした、家庭教育は自分達に宗教的信念を與へるに充分であつた。『神を恐れ、神を信ずるの心』は斯くの如き家庭教育によつて體得したのだ。而も人格を基礎とし、信念を土臺としたこの家庭教育は遂に自分の一生を完全に支配することになつた。自分は今でも物干竿の下は潛らない。止むを得ずして潛ぐる場合には、頭に手をのせて通る。一事が萬事！　今でも有形的に無形的に自分を支配し自分を指導する何ものかゞあるならば、それは十四歲の春まで家庭に於て自分を教育して呉れた文字なき無學者の『母性愛』である。故にそれは決して學問の力ではない。……さうだ、それは『家庭愛』に出發した人間教育の賜だ。こゝに於てか自分は『我國の教育を家庭に還せ』！と要求する。

今や我國產業の或ものは西洋模倣の大量生產的工場經營の一本槍から、我國特有の家庭工業

に還元することによつて、創造的發展を遂げ遂に世界的飛躍を見るに至つた。……凡て眞理は一つだ。我等は速かに我國の教育を家庭に還さねばならぬ。

二六、和協の心と愛の教育

近年若き者の心が兩親を離れ、家庭を離れ、更に國家を離れつゝある。これは誰れにでも得易いところの自分の家庭を享樂するといふことに滿足せずして、自分の幸福を世界の出來事のうちに求めようとする結果である。而して世人はこの實情を果して何と見る。これは我國の教育が、專ら唯物史觀に則した巧利的な知育にのみに偏し、人間教育に最も大切な人格を忘れ、精神を無視した結果ではないか。更に人格教育の本源地たる家庭を輕んじ、凡てのものを抱容し、あらゆるものを燒き盡さずんば止まないところの母性愛を無視した形式教育の盛んに行はれた、必然的結果にあらずして何であらう。

最近思想犯人が盛んに刑務所に於て轉向したことが報ぜられた。而して、その原因の大部分は、刑務所に訪ねて來た、母、妻、娘等の愛に動かされたものだといふ。一旦思想の惡化したものさへ、一度その溫き家庭愛、母性愛に觸るればその思想に動搖を來し、遂に過去の非を悟つて轉向するに至るといふ、この現象は果して何を意味する。

一旦惡化した思想の持主さへ、愛の力によつて轉向するといふならば、思想の惡化は愛の缺乏に出發してゐることの多いことも明かである。愛なき家庭、愛なき社會……そこに我等は思想惡化の策源地を發見する。

或高等學校の一學生が思想問題の爲め注意人物となつた。それを心配して訪ねて來た母親は氣の毒にも啞者であつた。もの、言へない母親は、母性愛の凡てを打ち込んだ兩の手を以て、子供の手をしつかと握つた。さうして子供の顏を見詰めた兩眼からは、熱い涙が止めどもなく流れ出た。……母の無言の愛はその瞬間に於て子供を轉向せしめずには措かなかつた。貴きは母の愛！　强きは愛の涙ではないか。

過日關西地方を襲つた大暴風雨は、多くの小學校兒童の尊い生命を奪ひ去つた。その際兒童

をかばひながらその尊い使命に倒れた多くの教員達があつたが、就中女教員の職に殉じたもの、數が多かつた。併しこれは女教員の方が男教員よりも勇氣があり、度胸があつたわけてはなく、あの瞬間女の尊い母性愛が、突差の間に發露した結果なりと考へるのが至當ではなからうか。そこに我等は女の持つ貴い或ものを發見するではないか。

家庭教育は斯くの如き母性愛を基調とするところに眞の強みがある。而してこの貴い母性愛を益々發揮せしむるに必要な教養を與へるのが女子教育の眞髓でなければならぬ。而も今日その點に缺くるところのあるのは疑ふべからざる事實であり、そこに、また色々の憂ふべき世相を生むの病源が宿るのである。

家庭教育の重んぜられた時代に於ける家庭婦人は、寧ろ無學であつた。併し人間としての修養は立派に出來てゐた。文字なき彼の女達は、人間道に出發した愛の力に飽滿し切つてゐたのだ。さうしてその愛の凡てを傾け盡して、子弟の教養に努めたところに、我等は眞の家庭教育を發見することが出來た。然るに學校教育の進んだ今日、學問ある有閑婦人の家庭に眞の家庭教育なきは何たる皮肉だ。彼の女達は家庭に於ける最高の幸福から離れ、たゞ自分の知識をきらめかし、その名譽心を擽ぐらんが爲めに、到る處の荒み果てた『見榮ばかりの舞臺』におどり出てゝ享樂を擅まゝにしてゐる。さうして無論そこには『家庭教師』はあるだらう。併し『家庭教育』はない筈だ。文字なきものゝ家庭に家庭教育があり、文字ある者の家庭に家庭教育なき、この矛盾こそ、眞に憂ふべき世相の病源ではないか。故に眞に家庭教育を中心として『人間教育』、『人格教育』を徹底せんとならば、先づ以て我國の女子教育に根本的革新を加へ、愛に出發した人間教育を完成しなければならぬ。ラスキンは『婦人の一番正しい教育の目的は、他の如何なる場所よりも、自分の家庭を愛させるにある』といつてゐるが、女子にはこの教育が眞に必要なんだ。

兩親より離れた若き者の心を兩親に返し、家庭から離れたその心を家庭に返し、更に國家から離れたその心を國家に返さんとするには、『愛』に出發しなければならぬ。……祖國愛――社會愛――同胞愛――家庭愛――母性愛――凡て愛は一つだ。聖德太子十七條の憲法にも先づ第

一に、『以和爲貴』と敎へられてゐる。『和』は日本精神の眞の姿だ。『和協の心』こそ我等日本民族のみが持つ眞の美德ではないか。古來日本には『權利』とか『義務』とかいつた樣な對抗的言葉は存在しなかつた。さうしてこれ等は凡て『つとめ』といふ言葉で表現せられた。從つて對抗的言葉のない日本には階級鬪爭等のありよう筈がない。日本古來の辭書には見ることの出來なかつた舶來品の爲めに、日本人特有の美德までも攪亂される樣では、我國の前途が案じられてならない。

我等は速に『和協の心』に還らねばならぬ。『和』を中心として九千萬國民の『愛の心』が統一せられるとき、そこに始めて我等は『神代ながらの尊き日本の姿』を發見することが出來るであらう。而して『愛の敎育』！ それは先づ家庭から出發しなくてはならぬ。

カーライルは『人間の愛は決して金で購ふことは出來ない。而も我等はこの愛なしには、他人と共存することは、とても出來ない』といつてゐる。卽ち『和』を目標とした人生は、たゞ愛の力によつてのみこれを營むことが出來る。而してその愛は金で賣買の出來ないものだ。愛の唯一の代價は『愛』である。故に『愛の敎育』は『愛』によつてのみこれを達成することが出來る。西洋の諺に『愛は愛の母だ』！ といふのも卽ちそれではないか。

二七、光は日本の家庭より

ペスタロッチーは、『家庭』が敎育の淵源であり、家庭を中心とした敎育が、ほんたうの敎育だと說いてゐる。さうして彼れの書いた『隱者の夕暮』の中には『神の親心、人の子心』とあり、更に『君の親心、民の子心』とある。

神は親の心を以て、凡ての人間を護り給ひ、人間はまた子の親に奉へるの心を以て神を敬ふそこに眞の人生があるのだ。併しそれよりも『君の親心、民の子心』こそ敎育の上には大きな力を投げかけるもではないか。『君は親の心を以て民を愛し玉ひ、民は子の親に奉へるの心を以て忠を盡す』そこに眞に平和な國家があり、眞に幸福な國民生活があるのだ、而して、我等は我が國に於て、特に然るべき所以のものを發見する。

我國の國體は皇室と臣民と『和』を以て終始一貫してゐるところに、その眞髓がある。上には常に衆民を愛撫するを以て、天職と爲し玉ふ聖天子をいたゞき、下には皇室に奉仕すること以外には何ものも存しないところの誠忠無二の國民がある。卽ち『一君萬民』の國體に我國の眞善美を發見するではないか。

日本の國家は、皇室を宗家とした一大家族によつて組織せられてゐることは、國史の明示するところである。故に歷代の聖天子何れも國民を遇するに赤子を以てせられ、そこに君の親心を遺憾なく發揮せられた。明治天皇の御製

罪あらはわれをとかめよ天津神
民は我か身の生みし子なれば

を拜し、誰れかその尊い親心に感泣しないものがあらうぞ。畏いことながら、これ程君の親心に徹した天子樣が外の國のどこにあるだらうか。これ程民を愛撫するの心に充滿し切つた主權者が、又とどこかにあるだらうか。尊きは我が國體！　有り難きは君の親心！　そこに我等は皇室を家長とした大家族的國家の誇を感ずるではないか。

我國教育の革新は家庭教育から出發しなくてはならぬ。而して家庭を中心として出發した教育が眞の教育なりとするならば、國家を擧げて一つの大きな家庭に過ぎないところの我日本帝國の教育こそ、眞の家庭教育に終始するものではないか。

斯くて我國の教育は、學校教育も、社會教育も、更に家庭教育も、凡て大日本帝國と名づくる大家庭の中に融け込み、更に大きな家庭教育を形作つて行くところに、日本の教育的特種性を發見するのだ。さうしてそこには聖天子が君の親心を以て國民を教へ導き玉ひ、生徒たるべき九千萬國民は、民の子心を以て師の教へを受け、以て『君民一體』の精華を益々發揮するのだ。卽ちそこに『和』を中心とし、『愛』に出發した眞の教育が確立せられるとき、始めて建國の大精神に則した、正しく强き日本の姿を發見することが出來るであらう。さうだ『光は日本の家庭より』！

二八、第一の寶は『人』だ

自分は國難打開の目標は、精神日本の再建と、農國日本の再建とに置くべきを論じ、更にこれが目的達成の爲めには、先づ教育の改善にその第一歩を踏み出すの必要を論じた。而して教育改善に關する私見の大綱に就て言はんと欲するところの大要も既にこれを述べた。たゞこゝに取り殘されたる問題は、この大綱を如何に教育制度及びその內容に適合せしめて具體的改革案を立案するかの點である。併し自分は今こゝにそれ等の具體案を提示しようとは思はぬ。如何となれば斯くの如きは教育改善の大方針さへ決定せられるに於ては、それ〳〵の教育技術の範圍に於て、これを制度化し、內容化すればよいからである。

併し、何といつても、我國の現行教育制度は、その形式に於て、その內容に於て、根本的の革新を必要としてゐる。卽ちこれは局部的の改善改造を以てしては、到底その目的を達成することは出來ない。故にその革新は全面的であり、總體的でなければならぬ。これ自分が熱心に教育の根本的建直しの必要を主張する所以である。

我國の現行教育制度は歐米模倣の急造バラックに過ぎない。而も風雨正に六十年、今やこれが改築の急務に迫られてゐる。故に速かに時代の要求に應じ、適切なる設計を立て、完全なる新家屋の建築を斷行しなくてはならぬ。而も、その新建築たるや、素より我國の『國體』を土臺とし、『日本精神』と名づくる國產の木材を使用し、凡ゆる日本の特種事情を表徵するに足るべき建築美を有するところのものでなくてはならぬ。斯くて、その出來上つた建築物は、その大きさに於て、その間數に於て、舊家屋と大差なしとするも、新築家屋に清新な氣持を以て住ひ得る丈けでも、確かに大きな教育的效果を擧げることが出來るのだ。

教育の改善は同時に文政機關の改善でなければならぬ。卽ち我國の文政機關は教育の本質に鑑み、中央に地方に改善を要するものが頗ぶる多い。故に文政機關の改造は今日の急務である。併し、凡て『制度』は末であつて『人』が本だ。……南洲翁も『何程制度方法を論ずる共、其人に非ざれば行はれ難し。人有て後方法の行はるゝものなれば、人は第一の寶にして、已れ其

人に成るの心懸け肝要なり。』と說いて居られる。故に論議は、もうやめにする。……凡ては『人』だ！『人』だ！

冀くは、滿天下の敎育家諸君！　諸君と共に、我等國民の總てが、その『人』に成るべく精進しようではないか。

◆新日本敎育叢書◆
第一

昭和九年十二月廿五日印刷
昭和九年十二月廿八日發行

精神日本の建設
定價一圓五十錢

著者　東郷實
發行者　高井望　東京市淀橋區西大久保一ノ五一五
印刷者　大杉直次郎　東京市牛込區若松町五四

發行所　玉川學園出版部　東京市淀橋區西大久保一ノ五一五　振替東京一五四二三番　電話四谷七四六五番

印刷所　大杉印刷所　東京市牛込區若松町五四

9. 12. 23

東郷實著書目錄

日本植民論	明治三十九年四月	（東京東京堂發行）
獨逸內國植民論	明治四十四年九月	（拓殖局發行）
獨逸の產業と植民政策	同年十一月	（拓殖局發行）
丁抹農業論	大正二年	（臺灣總督府發行）
瓜哇糖業論	同	（同）
臺灣農業植民論	大正三年九月	（東京富山房發行）
臺灣植民發達史	大正五年五月	（臺北晃文館發行）
植民政策と民族心理	大正十四年十月	（東京岩波書店發行）
植民夜話	大正十五年四月	（同）
植民問題を語る	昭和七年八月	（東京玉川學園出版部）
三等に乘りて（隨筆）	昭和九年十二月	（東京富山房發行）
精神日本の建設	昭和九年十二月	（東京玉川學園出版部）

兒童百科大辭典

◇顧問 文學博士 小西重直 ◇編輯 小原國芳

全三十卷

定價 一冊 五圓
豫約（毎卷 四圓
特價 一時 一〇五圓

（送料）
內地 三〇錢
台灣 樺太 六〇錢
朝鮮 滿洲 七五錢
外國 一五〇錢

子供のためには
無盡藏の智慧の庫
より優等生たるために
趣味溢るゝ自學自習書

親のためには
子供の質問に應ずる鍵
よき親たる義務のために
最新文化の驚くべき展開

敎師のためには
各科敎授資料大集成
他の一切の參考書不要
豐富周到なる大敎授書

一 動物篇　二 動物篇　三 植物篇　四 植物篇　五 生理衛生體育　六 物理篇　七 物理篇　八 化學篇　九 化學篇　一〇 理科工業篇　一一 天文氣象篇　一二 地理篇　一三 地理篇　一四 地理篇　一五 地理篇

一六 歷史篇　一七 歷史篇　一八 歷史篇　一九 歷史篇　二〇 美術史篇　二一 美術史篇　二二 文藝篇　二三 文藝篇　二四 音樂舞踊篇　二五 藝術敎育篇　二六 家庭篇　二七 地質鑛物篇　二八 數學篇　二九 哲學公民篇　三〇 修身篇

教育の本質觀　京大教授　小西重直著　一、二〇

勞作教育　文學博士　小西重直著　一、五〇

玉川塾の教育　小原國芳著　一、五〇

獨逸學校改革の精神　甲南高校教授　黑川惠寛著　一、〇〇

ペスタロッチーを慕ひて　小原國芳著　〇、八〇

ペスタロッチーにふさはしき妻　アンナ　ザイフアルト著　市村秀志譯　一、〇〇

ペスタロッチーに生きる　文學士　有馬良治著　一、〇〇

ペスタロッチー遺跡巡禮　廣島文理大教授　福島政雄著　一、二〇

若き日のペスタロッチー　成城高校教授　細井次郎著　一、八〇

公民教育の根本問題　東北帝大教授　廣濱嘉雄著　一、〇〇

吉田松陰とその教育　文學士　後藤三郎著　一、〇〇

數學教育の根本問題　理學博士　小倉金之助著　二、〇〇

綴方教授の根本問題　文學士　淺山尙著　一、五〇

理科教育の根本問題　成城學園講師　松原惟一著　一、五〇

本間全集（全五卷）　本間俊平著　一、二〇／一、五〇

三浦全集（全二卷）　三浦修吾著　各一、八〇

秋吉臺の聖者　本間先生　小原國芳著　一、五〇

ハルナック基督教の本質　山谷省吾譯　二、五〇

オットー聖なるもの　山谷省吾譯　二、五〇

ヒルティー宗教論文集　黑崎幸吉譯　山田幸三郎譯　各二、八〇

伊太利紀行　文學士　太宰施門著　三、三〇

百濟觀音　文學博士　濱田青陵著　四、四〇

文學概論　文學士　相良德三著　二、〇〇

西洋美術史　京都女專教授　伊勢專一郎著　三、〇〇

ペスタロッチー全集（全六卷）　各卷　並上　二、〇〇　二、〇〇

ウインデルバンド哲學概論　文學士　清水清譯　三、〇〇

フレー人の教育　小原國芳譯　三、〇〇

ウェーベル教育藝術の理論と實際　成城高校教授　相良德三譯　三、八〇

カンデンスキーの藝術論　小原國芳譯　六、〇〇

近代支那の政治及文化　文學博士　矢野仁一著　三、五〇

教育と內省　文學博士　岡部爲吉著　三、八〇

宗教教育の理論と實際　小原國芳編　二、五〇

母のための教育學　小原國芳著　二、五〇

哲學講話　文學博士　紀平正美著　二、〇〇

西洋哲學史　大阪高校教授　岡野留次郎著　二、〇〇

支那哲學　大谷大學教授　浦川源吾著　二、〇〇

印度哲學　京城大學教授　手島文倉著　三、五〇

現代の宗教哲學　文學博士　赤松智城著　二、〇〇

教育學の諸問題　廣島文理大教授　福島政雄著　二、五〇

近世教育史論　廣島文理大教授　長田新著　二、〇〇

心理學　京都帝大助教授　岩井勝二郎　文學博士　久保良英著　一、五〇

美學史　成城高校教授　相良德三著　二、〇〇

純正社會學概論　成城高校教授　銅直勇著　二、〇〇

自然科學概論　理學博士　石原純著　二、五〇

例話全集

小原國芳編

四六判各五百二十頁
總布表紙上製
定價各卷貳圓
送料十二錢

第一卷　聖者の光　第十二版
第二卷　第一義　第十版
第三卷　久遠の女性　第十一版
第四卷　永劫の相　新刊
第五卷　眞人の戰　新刊
第六卷　文藝に現れたる例話　近刊
第七卷　格言名句集　近刊

修身教授の例話に！
講堂訓話の材料に！
家庭の爐邊物語に！
眞純なる文學書に！

國定教科書德目に準據し
個人篇　家庭篇
社會編　國家編
に頒ち
取扱上の注意や適切なる
格言索引式目次を附す。

259
5
133

10年 2月 2日

閲覧済

終